論文 研究紀要, 第5号：35－46, 2001.

子どもとメディア

乳児期早期からのテレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性

土谷みち子

＜キーワード＞

ビデオ視聴　早期メディア接触　子どもの人間発達への影響　育児環境　臨床的保育アプローチ　学際的研究

＜要旨＞

ニューメディアが一般家庭に普及した1990年代以降、特にビデオ機器の普及は乳幼児のメディア接触を早め長時間にしたと思われる。本稿は、特に95年以降乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴が日常化している実態を調査報告し、ビデオ視聴が①単独視聴　②独力操作　③繰り返し視聴を助長し、さらに④養育者の「子守り機能」「教育機能」期待を高め、人間発達に重要な養育者との相互交渉や手足を使う遊びを乏しくさせ、テレビ視聴以上に子どもの成長への影響が深刻であることを述べた。

乳幼児初期から長時間テレビ・ビデオ接触した3歳児には集団場面で心配な行動が観察され、それは①情緒の表出　②対人関係・コミュニケーション　③視知覚　④象徴機能や遊び　⑤運動性　と他領域に及んだ。その視聴スタイルは、①1歳前からの視聴開始　②1回に長時間　③繰り返し（巻き戻し）視聴が多い　④一人で視聴（大人が声をかけない）　⑤外遊びをほとんどしない、であった。テレビ・ビデオ視聴についての議論には、単に長時間視聴を問題にするのではなく、その視聴スタイルや子どもの特性（おとなしい、集中しやすい）にも注目する必要があると思われる。また心配な行動特徴が観察された幼児には、①集団場面で対人緊張を示した際の「逃げ場」を「緩衝拠点」と設定したり、②「解放遊び」や「やりとり遊び」といった情緒の表出や人間関係を促す遊びを導入することで、表情が豊かになり他者とのコミュニケーションも円滑になっていった。心身の成長途上である幼児期の保育活動に、臨床的な視点と子どもの豊かな成長を育む保育内容の確認が求められる。また長時間メディア接触の背景には、現代の育児環境の困難さが見られ、今後は総合的な育児環境の改善に繋がる育児支援活動の再考が必要であり、同時に子どもの発達への影響に関しては科学的定量的な信頼性の高い研究が求められている。

1. 問題

日本の子ども達が、屋外で友だちと群れて遊ぶ姿を見かけなくなって久しい。昔の子どもの生活時間との比較（例えば1941年調査との比較、2000「子ども白書」）では、睡眠や身辺処理・学校内の活動時間にはほとんど違いが見られず、現代の子どもは家事や仕事などの生活体験が少なく、学校外の学習時間やテレビなどのメディア接触の時間は多くなっていることが特徴的である。小学校時代から時計を持ち、下校後の生活も忙しい現代の子ども達にとって、友達と遊ぶ時間も「約束」し、お互いの予定を調整している。物理的にも広くて安全な遊び場も少なく、遊びが成立するための、時間・仲間・空間という三つの「間」を同時に確保することが難しいことが、室内でメディア中心の遊びが主流となっている原因の一つであろう。しかしその傾向は、一向に変化しない学力偏重社会、今後のIT化時代の到来、子どもが巻きこまれる事件の増加

により社会的心理的不安の高まり等もあって、一層加速すると思われる。

平成5年に文部省が行なった「学習塾に関する実態調査」では、通塾率は小学生で23.6％、特に中学3年生で67.1％と学年が上がるにつれて高まり、全体平均でも36.4％と、昭和60年の26.3％と比較して年々上昇している結果となっている。経済状況悪化後も成績上位群の通塾率は増えているようだ[前出　子ども白書]。一方、国際比較調査[1999　文部省、小学5年生・中学2年生対象]で、テレビ・ビデオ視聴時間について、調査5ヶ国(韓国・アメリカ・イギリス・カナダ・ドイツ・日本)の中で日本は一日3時間以上の視聴が47％と最も多い結果である。また自然体験については、諸外国の子どもより、海や川で泳いだり昆虫を捕まえたりした体験は多いものの、日の出や日没・夜空いっぱいの星を見たり、大きな木に登ったりという体験が少ないことが報告されている。いわばゆったりとした時間の流れの中で、自然と向き合った体験が少ないといえるのではないだろうか。もっともテレビゲームやコンピューターゲームの使用は、「ほとんどしない」と回答している日本の子どもは、他国より最も多かった。子どものメディア接触については、他の調査でも指摘されているが、ゲーム使用に関しては男女差が大きく[1996　総務庁調査]、またテレビ中心だったメディアも、1990年代以降のニューメディア時代はビデオ・ゲーム・パソコン等多様化しているため、今後は単一の機種の接触について比較調査するのではなく、清川[2000]も指摘するようにメディアの総接触時間の比較と影響について科学的実証的な研究を行ない議論する必要があるだろう。

心身の最も成長する学童・青年期に、生活体験や自然体験が乏しく、遊びを通して仲間と接触する集団体験や、自発的な試行錯誤体験が少ないことは、成人後の生活スキルや対人関係スキル、また現実認識や価値観形成に少なからず影響を及ぼすであろう。また、テレビやテレビゲームの過度な暴力シーン視聴が、子どもの暴力容認傾向を強めているというテレビ暴力に対する議論[佐渡　1999など]も加わり、昨今の子どもの非社会的行為や反社会的行為の増加について、司法、教育、心理、またテレビ製作関係者等多方面から、子どもの生活や遊びとメディアとの関係が懸念されている[生涯学習審議会　1999、一場2000、清川　2000]。また、正木[1999]は教師の実感調査や各種調査から、視力や体温調節の不良、立体視機能や自律神経系の発達不全など、子どもの身体面での変化に強い警鐘を鳴らしている。

しかしながら、このような子どもの自然や生活体験・仲間遊びの減少とメディア接触の増加傾向について、小学生以上の年齢について議論されることは多いが、それ以前の乳幼児期に最もメディア接触時間が増加していることは社会的に認識、また議論されることは少ない。特にビデオ機器が1990年代に急激に家庭に広まり、95年には家庭への普及率が90％を超えると、後述するように乳幼児のテレビ・ビデオ総合視聴時間は急速に増加している。乳幼児期に接触するニューメディアは、テレビ番組の中で関心の高いアニメや幼児番組を録画し繰り返し視聴を可能にしたビデオ機器が中心である。

ニューメディア時代の到来と共に、子どもの生活世界や人間行動の変化について言及したものは多いが[例えば野田　1989、子安・山田編　1994、児島・橋元編　1996]、乳幼児のメディア接触時間の多さ、特に共働き家庭ではなく、幼稚園にも保育所にも入園していない未就園児の家庭でのテレビ・ビデオ視聴が多いことが懸念されることは少ない。その中で橋元[前出　1996]や麻生[1996]は、乳幼児が長時間ビデオ視聴していると思われる現実を取り上げ、その専門的見地から、言語能力に関する神経網の発達やコミュニケーション能力・視覚に関連した運動能力の未発達(橋元)、また現実と虚構の世界がつながりワンダーランド(イメージ)の世界の消滅(麻生)等、認知関連能力の発達について懸念しているが、それも可能性として指摘するに留まっている。1970年代にテレビの発達・普及後に指摘された乳幼児の発達への警鐘[例えば岩佐1977]について再び議論し、ニューメディアの影響との相違についても検討しなければならないであろう。

大人になる前に、心とからだの急激な成長を遂げる小学生以上の年齢の生活時間調査や遊びの持つ意味を考えることの重要性と同じように、ヒトとして誕生した乳児が、人間としての発達基盤を築く上で大切な生活の過ごし方も確認する必要がある。1990年以降のニューメディア時代、乳幼児はどのようにメディアと接触してきたのだろか。80年代に誕生した、現在の中学・高校生の乳幼児期と比較して考えてみたい。

本稿では、乳児期早期からのメディア接触、その中でも特にビデオ機器の普及と共に加速したと思われる乳児期からの両面視聴の現状を調査報告し、乳幼児期初期から長時間接触した幼児に集団において観察される心配な行動特徴について問題提起する。さらにその行動特徴に対して、幼児期の保育活動の中で展開される臨床的アプローチの有効性についても言及したいと思う。

2. 調査概要

(1) 調査1

1995から1997年に実施。協力者は横浜市周辺に在住する未就園の3歳児160名とその母親（当研究所在籍者）。記名式。核家族は93%、両親は90%近くが専業主婦と会社員の家庭である。面接は16名が協力し、そのうち10名を行動観察した。

(2) 調査2

1999年から2000年に実施。協力者は、神奈川県横浜市・藤沢市・鎌倉市の1歳から4歳の未就園児の母親180名。無記名式。家庭は核家族が86%、90%以上が専業主婦と会社員の父母の家庭。3名はテレビ未視聴であったため、177名を分析した。

(3) 調査3

2000年実施[1]。回答協力者は神奈川県在住の中学1年生から高校3年生1032名の両親のいずれか（母親が85.5%回答）。各学校を通しての配布・回収。無記名式。中学生68%、高校生32%（1982～88年生まれ）。男子56%、女子44%。核家族は71%。会社員の父親は81%。母親は、専業主婦35%、不定期な仕事をもつ母親15%、フルタイム7%、自営・自由業12%である。

3. 調査・面接結果と考察

(1) 乳幼児のテレビ画面視聴開始年齢

1. 現代の乳幼児（調査2の結果・図1）

1995年以降に生まれた1歳～4歳の幼児は、生後6ヶ月以前から視聴開始した者が20%、6ヶ月以降1歳未満は28%、1歳から1歳5ヶ月までは32%、1歳半以降が15%であり、1歳前の乳児期早期からの視聴が48%と半数近い結果だった。NHKテレビでも、「赤ちゃんとテレビ」という番組放映がされた（2001年7月）ように、乳児期からテレビをみている現象は、「当たり前」の時代となっている。生後6ヶ月前から視聴していた家庭の回答では、「生後すぐにテレビを見ているきょうだいの隣りに寝かせた」・「授乳時いつも母子が一緒にテレビを見ていた」・「2ヶ月から乳児用の椅子に固定して座らせてテレビの前におき母親は家事をしていた」、また2ヶ月～4ヶ月時開始に集中するのは・「英語や文字のビデオ教材を一定時間見せていた」等の教育目的がみられた。

2. 1980年代の乳幼児（調査3　図2・図3）（1982年生れから1988年生れまで）

15年以上前の記憶を回答依頼したため、6ヶ月未満開

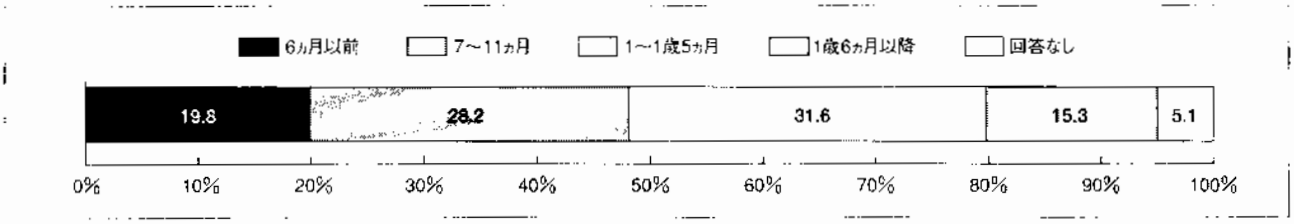

図1　テレビ画面の視聴開始年齢（177人）

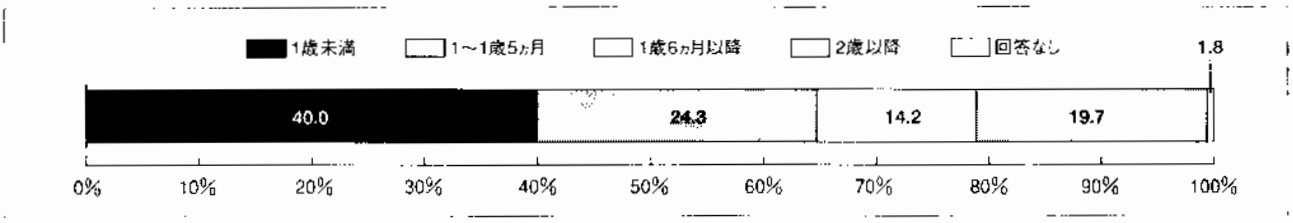

図2　中・高生のテレビ画面視聴開始年齢

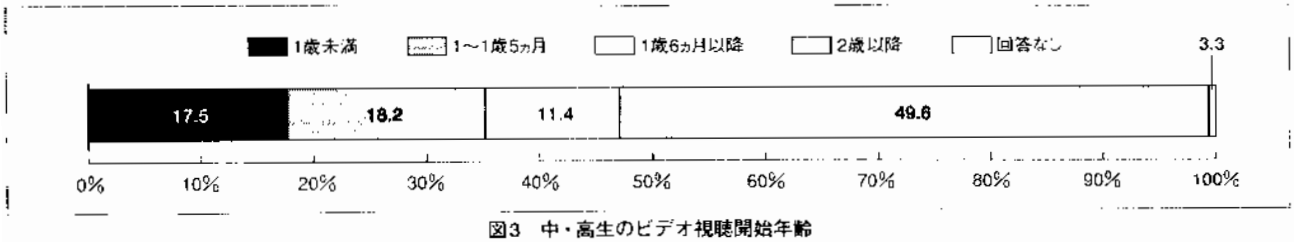

図3　中・高生のビデオ視聴開始年齢

始は選択肢に設けなかったが、1歳以前は40％でやや少ないが、特に1歳半以降の視聴開始が34％と現在より多い。テレビは1964年の東京オリンピックを契機として翌65年に100％近い普及率となっていて、80年代には1家庭に数台のテレビがあることも多く、家庭の娯楽メディアがテレビ中心の時代であったが、それでも乳幼児には視聴開始を遅くしていた家庭が多かったようだ。

一方、ビデオ視聴開始は、ビデオ機器の普及（81年に3％以下、90年に60％の普及率）が充分でなかった時代に、1歳前からの視聴開始をした家庭は18％に留まっていて、2歳以降が50％と半数をしめていた。現在の1歳児は、毎日ビデオを見ている割合が95年調査時（90％の普及率）よりも9ポイント上昇して56％で、まったく見ていないは4.3％に留まり、一人でビデオ操作できるのは16％と報告されている［ベネッセ　2000］。1歳以前の調査報告は見られないが、1歳児のビデオ使用は日常化しているといえる。調査2と調査3では、協力者の家庭の属性が異なるので単純には比較できないが、同じ神奈川県下の家庭であること、子どもの成長と共に母親の就業形態は変化する日本の特徴があることを考慮して考察してみると、1990年代以降のビデオ機器の普及以降、乳児のテレビ画面視聴開始が早まってきたことが考えられる。

(2) 乳幼児の一日のテレビ・ビデオ視聴時間と外遊び時間：図4と図5

1. 調査1と当研究所の10年前の調査との比較

当研究所に在籍した3歳児をもつ家庭に、幼児の一日のテレビ視聴、外遊び時間を伺った結果が図4・図5である。10年前の調査協力者と属性の差が見られないので比較検討してみると、テレビ視聴時間は10年前とそれほど違いがないが、外遊び時間分布は10％ほどずれ平均して1時間以上の減少と捉えられた。

2. 調査1のテレビ・ビデオ合計視聴時間：図6

1の結果と総合すると、現代の画面視聴時間は、10年前のテレビ視聴時間は減少せずに、さらにビデオ視聴時間が加算された結果といえよう。3時間以上が62％で、4時間以上も27％見られた。本調査は記名式で最高は6時

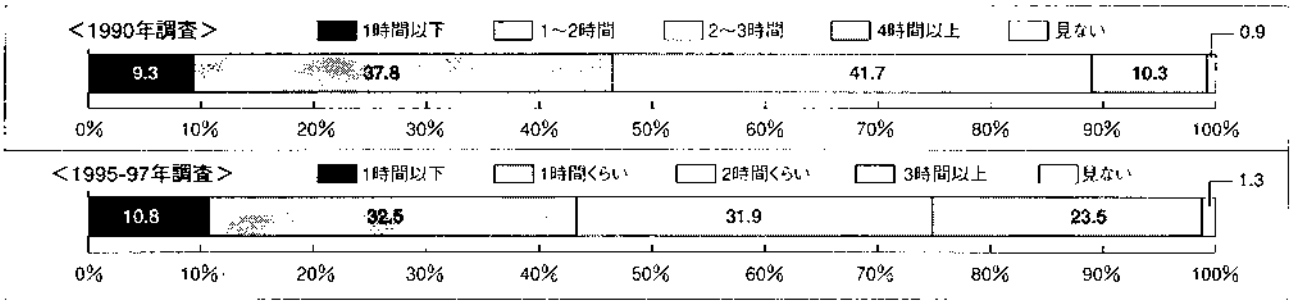

図4　3歳児のテレビ視聴時間（1990年調査と95-97年調査との比較）

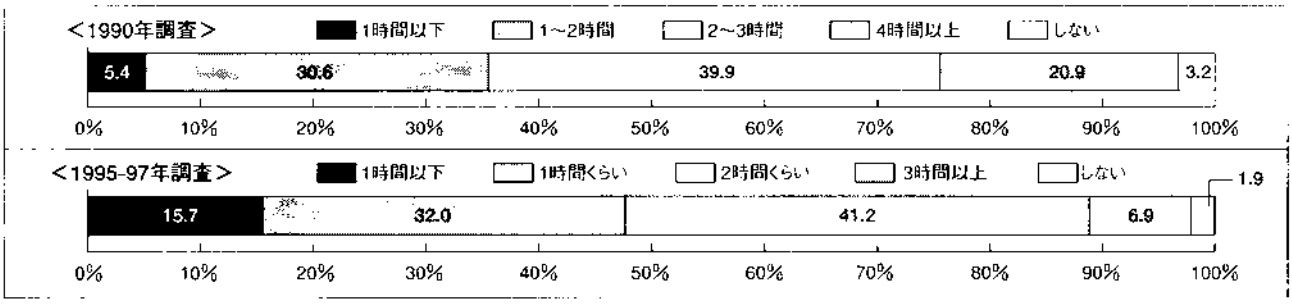

図5　3歳児の外遊びの時間（1990年調査と95-97年調査との比較）

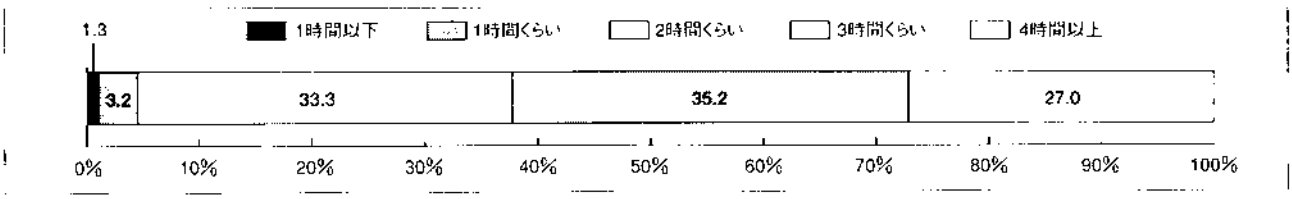

図6　テレビとビデオの合計視聴時間（3歳児159人）

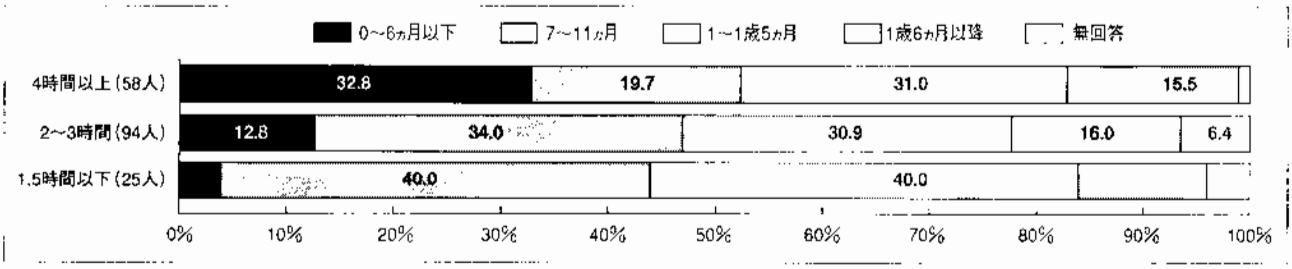

図7　乳幼児の視聴時間と開始年齢

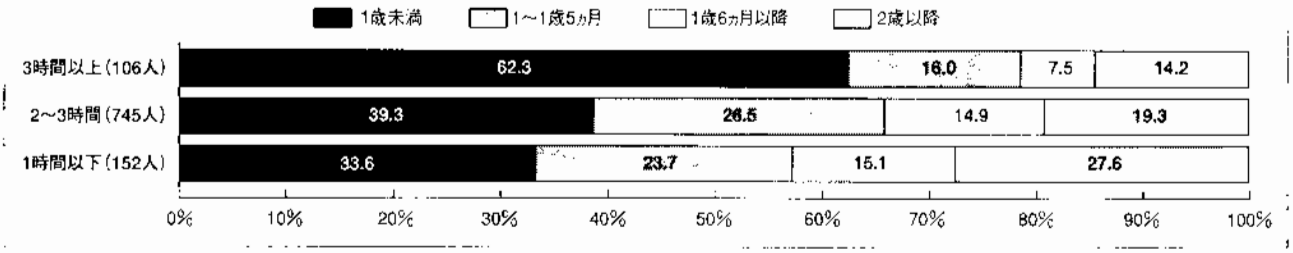

図8　小学生時代の視聴時間と開始年齢（中・高生1003人）

間で4名だったが、無記名式で行なった調査2では、一日30分の視聴家庭から9時間の家庭まで分布した。テレビを見ていなくてもつけている（映写）時間は、2時間以下が15％だったが、10時間以上も19％で、最高は16・17時間の家庭も5．6％あった［土谷　2000］。小学生対象の調査でも、親に視聴時間や番組の制限を受けている子どもは32％にとどまっている［佐渡　1999］ことをみても、日本の家庭でテレビの長時間視聴が無防備で行なわれていること、また短時間視聴家庭と両極の結果が分布し、家庭による違いが大きいことが考えられる。

調査1・2の協力者は、幼稚園にも保育園にも通っていない3歳の未就園児であるが、NHK調査［1999］やベネッセ調査［2000］でも、95年以降1歳～4歳の未就園児のテレビ・ビデオ視聴時間の増加が特筆されている。視聴は平均3時間であるが、30分ずつ増加傾向［NHK］があり、特に1・2歳児のビデオ活用が増えている［ベネッセ］ことが記載されている。

(3) 子どもの視聴時間と視聴開始年齢との関係：図7と図8

幼児（1～4歳）の画面視聴時間を、NHK調査と同様に平均視聴時間（2～3時間）を中央グループとして、1.5時間以下と4時間以上の3グループに分け、それぞれの視聴開始年齢を比較した（図7）。日常4時間以上画面視聴しているグループの幼児は、他の視聴時間グループの幼児より、生後6ヶ月以前からテレビ画面を見ていた幼児が多かった（$\chi 2(2) = 43.13$, $p < .01$）。また、中・高生の両親に小学生時代の画面視聴時間を伺った結果と、視聴開始年齢を比較した結果（図8）では、3.5時間以上の長時間視聴グループの子どもは、1歳未満から視聴開始していた割合が高い結果であった。

これらの結果から、視聴時間と開始年齢に因果関係を見出すことはできないが、幼児期や学童期に長時間画面視聴している子どもは、乳児期からテレビ画面に接触していた割合が高いといえる。そして、乳児期早期からテレビ画面に接触させると、その後視聴時間が長くなる可能性を示唆しているといえよう。

(4) 幼児の長時間画面視聴の背景

1 親のテレビ嗜好性と依存性の大きさ（調査2：図9）

乳幼児の視聴時間グループ別に、テレビの視聴に関わらず、家族の中にテレビがついていないと「さみしく感じ

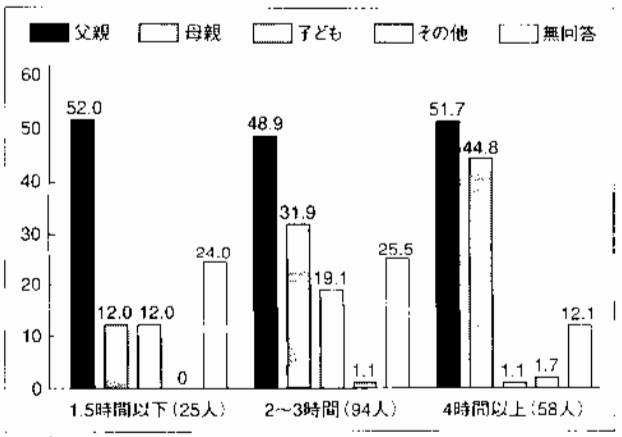

図9　乳幼児の視聴時間と「さみしい」と感じる人（177人）

る人」がいるかを尋ねてみた(図9)。父親は子どもの視聴時間にかかわらず、テレビがついていないとさみしく感じる方が多く、母親は長時間視聴幼児のグループが他のグループより多い結果だった。これは、母親のテレビ視聴時間と幼児の視聴時間には関連性があるという結果[NHK 1999]を確認することになった。主に母親と一緒に在宅している時間が長い、未就園児の幼児のテレビ画面視聴が増加している背景には、少子化・核家族化・地域の子育て機能の低下に加えて、両親共にテレビがついていないとさみしく感じる、生まれた時からテレビがあった「テレビ世代」が親世代になったことも関係しているのではないだろうか。

実際に面接の中では、「私たちは、帰宅するとすぐテレビのスイッチをつけ、それからうがいという世代」「一日中テレビがついていないと落ち着かない。空気と同じ」「帰宅すると、まずスイッチをつける夫が問題。寝ていても子どもが起きてきて一緒にみてしまう。」等の意見が聞かれた。

②テレビに頼る現代の子育て環境の貧しさ(調査1・2)

調査2で、3歳時に外遊びは1時間以下だが、テレビ視聴以外に毎日ビデオ視聴を2時間以上していた子ども16名の母親に、乳児期からの画面接触の経験を詳しく面接した(図10のC・Dグループ)。乳児期から意図的にビデオ視聴を長時間した背景には、「子守り機能」と「教育機能」の2つの機能に対する期待がみられた[土谷 1998]。

「子守り機能」には、「父親の帰宅が遅く、子どもを比較しあう母親同士の付き合いも苦痛で、1日中子どもと向き合って疲れてしまう。」「母親が病弱、出産後だったり、また転居直後で外出もままならない。」「きょうだいが年子、双子、ハンディのある子どもなど、一人で2人以上を一日中抱えることが難しい。」「母親が在宅の仕事をしている。」等の回答が見られた。核家族で地域との関係が希薄な中、全員が集合住宅の密室の中で、母親一人が過重な育児の負担を担っている現代の育児環境の貧困さが見られ、もう一人の育児の担い手をテレビという物に求めた回答内容であった。

また、最近の傾向として、子守り機能の中には「子どもに煩わされたくない」という思いで、昼寝や夜の就寝時に、布団に寝かせてテレビのスイッチをつけるといった、入眠時の使用も見られた。同じように、泣いたり、だだこね、かんしゃくを起こしたりした時にも、スイッチの使用は増す。調査3の面接時にも、その使用方法は多く採集され、正確な把握は今後の課題であるが、その傾向は増していると思われる。親になる以前に乳幼児との接触経験が乏しい親世代にとって、子どものノンバーバルな行動には距離感を感じて「どう扱ったらよいかわからない」「遊び方がわからない」「ことばも話さないので異星人のようだ」ともてあます。子どもの機嫌が悪い時の対処法にテレビ画面使用が増加する傾向がみられた。

もう一つの「教育機能」には、「母親が外国留学の経験があり、英語を話せる子どもにしたくて、結婚前の退職金で教材ビデオを購入した。」「情緒の豊かな子どもに育てたくて、映像のきれいな風景ビデオを日課のように見せた。」「ことばがでないので、検診前に話せるようにしたくて、文字学習のビデオを繰り返し見せた。」「祖母と父親が、頭の良い子に育てたくて、セットの教材ビデオを購入した。毎日祖母の訪問を受けて使用を確認された。」等の回答を得た。少子化時代に、貴重な子どもは家族の願望や葛藤の対象となりやすい[渡辺 2000]と指摘されるが、子どもの意志より家族の子どもに求める附加価値[中野 1995]のためか、面接では「いい刺激を与えたかった」という回答が共通していた。ビデオは録画、巻き戻し、再生が可能で、意図的に何度も見せることができる。子育てに養育行動よりも教育的役割が強くなっている昨今、子どもとの休ごとの付き合いの自信がぐらつくと、早期教育が流布する[正高 1995]背景があるのかもしれない。

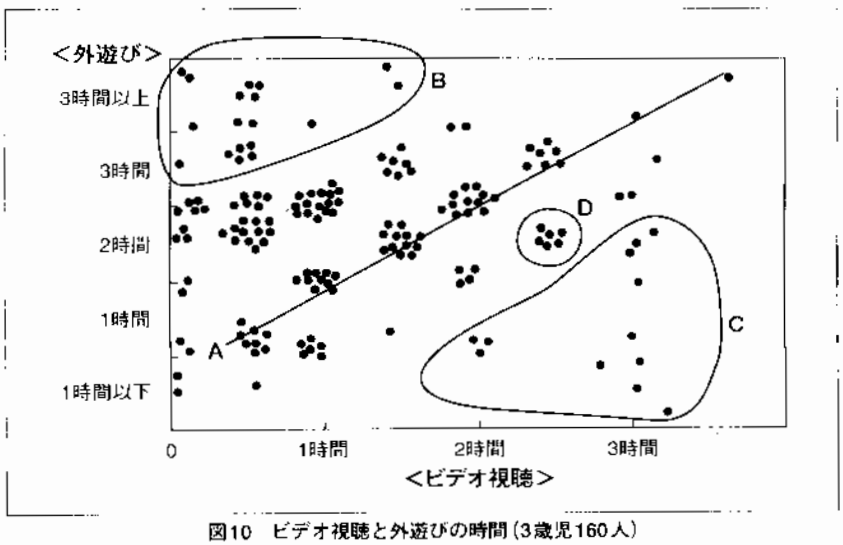

図10 ビデオ視聴と外遊びの時間(3歳児160人)

(5)乳児期早期から長時間視聴をした幼児の行動特徴（調査1の対象幼児の行動観察）

調査2で3歳時160人の1日の過ごし方を、五感を使う直接体験である「外遊び時間」と、視聴覚中心で間接体験である画面視聴時間のうち、家庭によって使用頻度の違いの大きい「ビデオの視聴時間」を抽出し、その関係を図にプロットした（図10）。乳幼児の生活に外遊び時間を短縮させ、1990年代以降テレビ視聴に加算されたビデオ機器使用の影響を考えたい。中央の線上のAグループは、外遊びとビデオ視聴時間がほぼ同じであることを示し、A線から上の分布は、ビデオより外遊びの時間が長い（特にBグループ）生活時間を過ごした幼児である。したがってA線から下部の分布は、外遊びよりビデオ視聴の時間が長い生活をしている幼児である。間接体験には、さらにテレビ視聴時間が加算されることを考えると、直接体験との比率はさらに大きくなることが予想される。下部の分布で際立つグループがCグループである。

当研究所は、実践活動で親子教室を開催しながら、親教室では両親の学習会や懇談会、また相談活動を行いながら、同時間に附属の幼児教室で複数担任制を採用して、22人の幼児を5名の保育・心理・教育スタッフで保育活動を行なっている。スタッフの参与観察によると、Bグループの幼児は入所後緊張がみられても、スタッフの1対1のアプローチを行なうと、徐々に自発的に集団活動に参加して遊びを楽しむ姿が見られる。しかし、Cグループの幼児はスタッフの働きかけに反応が乏しく、集団で観察される3歳児の成長特徴としても、心配を感じる行動特徴が見られた。またそれは、Dグループの幼児にも共通して観察され、前述したようにC・Dグループの幼児18名のうち16名（2名は転居先不明）の母親に協力を依頼し、乳児期からのテレビ・ビデオ接触の過程を面接または電話での聞き取り調査で採集した［上谷　1998］。16名のうち、特に心配を感じた10名の行動特徴について、筆者と保育者3名の観察結果を表1に示す（一致率89.9％）。表1の行動分類は筆者による。

3歳時期に集団場面で心配な行動が観察された10名には、共通したビデオ視聴の接触過程・スタイルが見られた。①乳児期に視聴開始　②一回に長時間（2時間～5時間）③繰り返し（巻き戻し）視聴が多い　④子どもが一人で視聴　⑤画面を見ている時間より外遊びが非常に少ない、であった。

そのうち1名は、母親の病気療養中に2歳以降にビデオ

表1　集団場面で見られる行動特徴（長時間ビデオ視聴の幼児）

	行動項目	該当数（10人中）
	＜情緒＞	
1)	表情が乏しい	9／10
2)	気持ちが通わない	9／10
3)	突然かんしゃくを起こす	4／10
	＜対人関係＞	
4)	友達関係が持てない	10／10
5)	子どもが近寄ると避ける	8／10
6)	自分の殻に閉じこもっているように見える	7／10
7)	わかることでも、いちいち指示しないとできない	7／10
8)	まねをして遊ぶことをしない	8／10
9)	ゲーム（ジャンケン、トランプなど）ができない	8／10
10)	他人の動作・体操などをまねすることができない	7／10
11)	音や声に反応しにくい	6／10
12)	人の声や音に過度に反応する（*緊張する）	6／10
13)	指指しをしない	5／10
14)	危ないことがわからない	5／10
15)	ことばをかけても無視する	3／10
16*)	保母や他児の遊びや歓声に振り向いたり接近しない	10／10
	＜運動性＞	
17)	身のこなしがぎごちない	7／10
18)	運動神経がにぶい	6／10
	＜視知覚＞	
19)	視線が合わない	8／10
20)	人や物（車や絵本）を見る時に一部分のみに目をつける	4／10
21)	横目で見るような妙な目つきをする	4／10
22)	こちらの指さした物に視線が定位しない	4／10
23)	物を追う視線が動かない（追視）	4／10
	＜遊び・象徴機能＞	
24)	遊びが限られている	10／10
25)	積み木などを、何かに見立てて、想像して遊ぶことができない	9／10
26)	ごっこ遊びをしない（ままごと、人形ごっこ）	8／10
27)	おもちゃで遊べない	5／10
28)	いつも同じ仕方、順序にこだわる	3／10
	＜コミュニケーション＞	
29)	自分から話しかけようとしない	9／10
30)	声を出すことが少ない	7／10
31)	話す抑揚がない	7／10
32)	前に聞いたこと、言われたことをひとり言のように言う	6／10
33)	例えばジュースが欲しいときに「ジュース欲しい」と言わずに「ジュースあげる」と言う	6／10
34)	「だれ」「どこ」「いつ」などの質問に答えられない	6／10
35)	場面にふさわしくないことを言う	6／10
36)	ことばやジェスチャーの理解が悪い	6／10
37)	おうむ返しで言う	5／10
38)	助詞・接続詞などを使わなかったり、間違ったりする	4／10
39)	ことばで指示しても、従わない	3／10

注　*16、22、23）は筆者の参与観察記録から作成した項目である。12）の＊は、「過度の反応」について「緊張」と捉えたことを示す。なお、領域の分類は、筆者による。

視聴を開始していたが、隣室に1日中テレビはついていて、2台目のテレビでビデオを一日5時間以上連続視聴をしていた。本児は足がしびれて立てなくなることもしばしばだったが、一緒に見ていた妹は途中で飽きて、テレビの前に落ち着いて座ることは少なかったという。2歳以降に視聴開始しても長時間の連続視聴、画面に吸い込まれるように見続ける子どもの特徴（おとなしめの子ども）等が、心配な行動をさらに誘発していると思われた。つまり、メディアの子どもの発達への影響を議論する際には、単に長時間視聴を問題にするのではなく、視聴スタイルの問題や影響を受けやすい子どもの特徴も考慮して議論することが求められると思われる。

表1に示した心配な行動特徴は、1情緒の表出　2対人関係・コミュニケーション　3視知覚　4象徴機能や遊び　5運動性　と多領域にわたり、上記の共通視聴スタイルによる、乳児期早期からの長時間画面視聴の影響が懸念された。

4. 議論

(1) テレビとビデオの使用や視聴スタイルの違い

90年代以降のビデオ機器の普及によって、乳幼児のテレビ画面視聴がより早期化、連続長時間化したと推測されたが、ビデオ視聴の特徴を整理する。ビデオはテレビより、乳幼児が1単独視聴、2独力操作する傾向が高まり、3繰り返し視聴しやすく、さらに4養育者の「子守り機能」「教育機能」の期待も増加するといえる。

1「単独視聴」について、総数3270人を対象にしたベネッセ教育研究所の調査［2000］から、1歳～3歳児を抽出して1995年調査と比較してみる。テレビの単独視聴（乳幼児が一人で見ている）は、1995年には10～13％、2000年には1.1から9.5％となり、ビデオの単独視聴は、1995年には24～32％、2000年には11～31％となった。2000年調査で1歳児の単独視聴が減少しているのは、1995年以降主に育児雑誌等から幼い子どもの単独視聴への警鐘がされた結果を受けているようだ。テレビよりビデオを必要なときに子どもが単独視聴している実態が浮かぶ。

2の「独力操作」については、箕浦［2001］が中野［2000］の聞き取り調査で、1歳男児がテレビのチャンネル変更は理解できなくてもビデオ操作を一人でしていたり、2歳女児がコマーシャル部分だけを早送りしてビデオ視聴している事例があり、乳幼児にとってテレビよりもビデオ操作の方が容易な実態を紹介している。前述のベネッセ調査では、テレビ操作との比較はされていないが、一人でビデオ再生操作が可能（独力操作）な乳幼児は、男女差も報告され、1歳では男児19.7・女児10.9％、2歳では男児42.9・女児34.8％、3歳で既に過半数の幼児が独力操作している。筆者も母親が次子出産時に、1歳半で毎日一人で操作してビデオ視聴していた男児に面接したが、単独視聴傾向が高いビデオは、多チャンネル操作のテレビより操作手順の因果関係が理解しやすく、一人で操作する傾向も高くなるのであろう。

次に、3ビデオの繰り返し視聴可能の特徴だが、養育者が子どもの喜ぶ顔や夢中で見ている姿を確認すると、巻き戻して視聴することが生じやすい。乳児に対する刺激は大人が知覚するよりも強い刺激と受信され［T. Bower, 1979］、視力も弱いため画面に接近して視聴するので、養育者は乳児が画面に強い関心を示し夢中になっていると錯覚しやすい。視覚は静止物より運動性のある物体に関心がむきやすいので、室内の中では絶えず変化する画像を発信するテレビ画面に最も注意が向けられやすい。連続する諸事象が繰り返し過ぎると、注意が失われ興奮が適切以下に落ちて［D. Stern, 1977］しまうため、画面の前で乳幼児がことばも話さずに（足がしびれても、おもらしをしても）視聴していると、注意や興奮が低下してボーっとしている姿が「集中力がついてきた」と誤解をしやすく、繰り返し視聴の悪循環を一層招きやすいといえる。乳幼児の成長・発達への影響が心配な所以である。

最後に、4ビデオはテレビより「子守り機能」・「教育機能」が高まることについては、一定時間に番組放映されるテレビより、ビデオは利用者の意志によって簡便に視聴が可能であることによる。子どもの意志による自らの操作による画面視聴は、筆者の聞き取り調査や前調査でも1歳6ヶ月前後である。それ以前から乳児が画面を視聴している実態は既に述べたが、つまり養育者の見せる意図がビデオはより働きやすいといえよう。面接で得られた「子守り機能」「教育機能」を期待し、子どもの意志が芽生える以前から、テレビ画面を視聴させる傾向が高まり、後の長時間視聴にも繋がりやすい。子どもの自発性の成長・発達が危惧される。

(2) 乳児期早期からのメディア生活が乳幼児の成長・発達へ与える影響

（3．結果）で、一定の視聴スタイルによる乳児期早期からの長時間ビデオ視聴をしていた幼児について、3歳時に観察された心配な行動特徴を発達領域によって指摘したが、ここでは乳幼児の成長・発達に影響を及ぼすと思

われる長期的な可能性を整理する。

1 養育者との情緒交流・社会的相互作用の減少から情緒の表出・コミュニケーション・対人関係スキルの低下を招く。

2 巻き戻し、繰り返し視聴の習慣化から注意のコントロールの低下を招き、自らの関心・好奇心の発動によって対象に視線を定位・注意を集中することが困難になる。

3 与えられる刺激を受信する生活スタイルが中心になると、乳幼児期初期の感覚　運動期の自発的探索活動が乏しくなり、身体による世界認識が萎えていく。

ビデオの単独視聴・独力操作する傾向の高さから、利用頻度が増すと、乳児期に最も必要な養育者との情緒的な交流が不足し、人間発達の基礎的な成長が阻害される危険性がある。養育者とのゆったりとした時間の流れの中で表出される表情の交換や情動調律[D. Stern]から、養育者との信頼関係を深め愛着を形成し、対人関係スキルを発達させていくことが乳幼児期初期の発達の大きな課題である。現代の育児環境は、乳幼児の接触・養育体験の乏しい母親一人に過重な負担が集中している傾向が強いため、簡便なビデオ使用が習慣化しやすい。小児科の医師からもビデオ使用を制限することばの発声、発達が改善された報告[片岡　1999]がだされ、橋元[1996]の危惧した「乳幼児期に過剰に映像メディアに接すると、人と人とのコミュニケーションにおける、相づち、頷きなどのノンバーバル信号の交換の学習を阻害しかねない」、さらに「進化の歴史が形成してきた言語発達促進メカニズムが作動せず、言語能力に関する神経網の発達を阻害する可能性がある」ということが現実に観察されている。

また、乳児の自らの意志ではなく、一方的に過剰な刺激を与えられると、その強い刺激に対して反応し、それが日常化すると、その後慣れが生じて自らの注意を対象に集中せずにぼーっとしたり、幼児期になっても無目的な行動をすることが多くなると思われる。興味・関心のあることを見つけた時の子どもの目の輝きは、自らの注意を対象に集中した時の行動である。心が動いてから、脳からの行動の発令をまち、対象への接近という行動が発現するのである。そのような行動の乏しい幼児には指示や誘導をしないと行動できない傾向がある。またより強く早い変化のある視覚刺激に対して反応する傾向が高まるので、視聴覚活動をしていても視覚の優位性が一層助長され、他の感覚刺激、特に聴覚のみの刺激の受信は弱くなり、聞く力が萎えると思われる。学童期の学習活動への影響も大きいと思える。

そして、視覚を中心とした刺激を受信する受け身の生活が中心になると、自発的な運動による結果を視覚的なフィードバックで確かめるという、乳幼児期初期に重要な探索活動が低下し、身体の感覚統合や、人間本来の認識体系に変化が生ずるのではないだろうか。

パターン認知能力が優れるという肯定的側面を強調する議論もあるが、乳幼児初期の場合その議論は危険である。久保田[1997]は、乳児期の8ヶ月から12ヶ月までを脳の「シナプス過剰形成期」と紹介して、この歩行開始時期までに手足を含めて五感からさまざまな刺激を得て、脳のあらゆる部分を使って体験をさせなければ、人間としての基礎が作られないとしている。偏った感覚器官を駆使した日本の乳幼児への超早期教育について、諸外国の研究者や臨床現場から幼児虐待に等しいといわれるが、その警鐘の多さ[汐見1993、中野1993、高良等1996、渡辺2000]を参考にしたい。

5. 長時間画面視聴をしていた幼児への臨床的な保育活動の有効性

人間発達の基盤が形成される乳児期早期から、テレビ・ビデオ視聴を中心とした生活をしていた幼児に対して、当所附属幼児教室で試みた保育活動の有効性について、主に空間形成の観点からと遊びの活動内容の観点から述べる。

(1) 他者との関係形成が困難な幼児に設定した「緩衝拠点」の有効性

幼児教室入所時3歳3ヶ月だった女児は、毎日2～4時間一人で巻き戻しのビデオ視聴をしていた。集団場面では保育者や他児のいない場所で独り言を言ったり、手に一つの遊具をもってふらふらと歩き回っている姿が観察された。他児に物を取られると、足をつっぱって奇声をあげパニック行動をおこし、他者のいないダンボール電車の中や木製のヤグラに入るという行動をした。数ヶ月後筆者は本児に追従して関係形成を試みながら、一対一の臨床的な係わりをもった。その際の基本的なアプローチは、「お互いの生命体にとまどい、つまづき、とどこおり」(相互障害状況)がおきているのであるから、「相手に何かをさせようと強制したり、無計画に干渉するものではなく、障害状況に対して、適時、適切、適度に援助を与え、あるいは控えることによって、相手が自らの力で障害状況を乗りきれるようにすることで、生命活動の拡大、補強を輔

(たす)けることにある」[Umezu, 1978]。そこで、本児が自らのパニック(救急)行動の後や他者に緊張した時に、閉じた空間に身を置くことを尊重し、その行動をパニックを回避するために必要な、衝撃を緩和するための「緩衝行動」[梅津 1976]であると解釈し、その行動拠点を「緩衝拠点」と命名して設定した[上谷 1999]。一般の保育場面でも、他児の活動に関心が乏しい幼児が廊下のコーナーや机の下に隠れる行動を観察することがある。つまり、幼児にとって自ら行動を起こす「逃げ場」には、その意義があると思われる。その後女児は、緩衝拠点と他者との交流をする「主活動拠点」を行き来した。当初は筆者と一緒に、後に一人で行き来して筆者に「おかえり」といわれ、2ヶ月後には緩衝拠点には戻らなくなった(図11)。(表1の行動観察結果では、入所当初26 39項目から半年後対人関係・コミュニケーション項目の心配な行動は減少し8 39項目となった。)

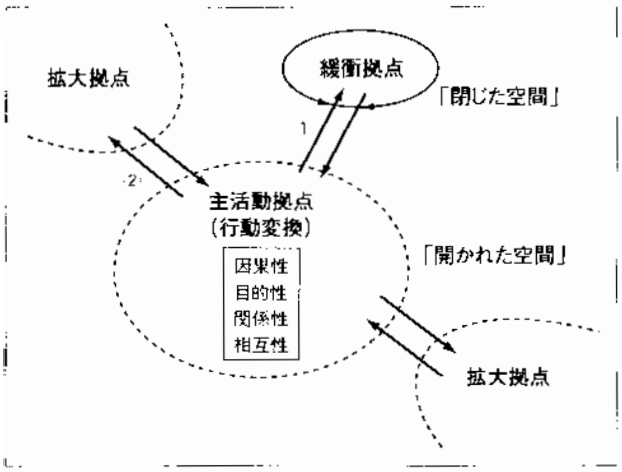

図11 緩衝拠点と主活動拠点／拡大拠点の設置

(2) 情緒の表出が乏しい幼児に行った「解放遊び」と「やりとり遊び」の導入

入所当初2歳6ヶ月だった男児は、表情が乏しく感情の表出がほとんどみられなかった。父親は帰宅が遅く、家庭でも自室にこもり仕事をする方で、母親は慣れない育児を24時間一人ですることに疲れていた。4ヶ月頃からテレビの前に一人でおき、ビデオ視聴を長時間させた。本児はおとなしく見て、集中しているように思えたという。

保育場面では、特定の保育者が本児と関係形成を試み、一緒に感触の心地よいお湯、水、粉、泡、スポンジ等を触って「いい気持ちだね」と、感情言語を投げかけながらゆったりと遊び、心身の解放をねらった。「解放遊び」は、身体をとおして感情を伴った経験を人と一緒に重ねることによって心とからだを解放し、情緒の表出を引き出していく。特定の保育者との信頼関係形成は、養育者も巻きこんだ三者関係に発展し、後に養育者への愛着形成へと移行していく。その頃「やりとり遊び」も導入すると、物の「ちょうだい」・「いいよ」、「あげる」 「ありがとう」が成立し、その後ことばのコミュニケーションもスムーズになっていった。(表1の行動観察結果では、入所当初30 39項目から、1年後情緒・対人関係・コミュニケーション項目の心配な行動は減少し、6 39項目となった。)

6. まとめと今後の課題

ニューメディアが一般家庭に普及した1990年代以降、乳幼児の生活に最も影響を及ぼしたビデオ機器は乳児期のメディア接触を早め、テレビ・ビデオ接触を長時間化させた可能性を指摘した。家族の生活や子どもの健全な発達を支えるために、今後の課題を整理する。

(1) 学際的な研究チームにより、メディアの過剰接触による子どもの発達への影響に関して、成長段階の違いによる差異を科学的定量的に検証することが求められる。

乳児期早期からのテレビ・ビデオ長時間視聴は、乳幼児に必要な養育者との情緒交流の機会や脳の神経回路を形成する手足を駆使した五感の体験を減少させている。メディア接触すべてが乳幼児の成長・発達に悪影響を及ぼすという議論ではなく、直接体験と間接体験のバランス、特に直接体験を充分にした上で間接体験をする重要性を認識したい。その意味で、乳児期早期の養育者主導のテレビ・ビデオ接触には警鐘を鳴らしたい。また、筧浦[2001]は、知覚の神経機構を研究している下條[1999]の「人間があらかじめもっている遺伝情報と身体(姿勢・感覚器)を通してかかわりあった経験の総体を脳の「来歴」と捉え、それが人間の世界を認識する枠組みとなる」知見と、澤口[1999]の前頭連合野の人間的な知性の発達に関する議論を引用し、学童期までの脳の感受期におけるメディア接触の影響性を家庭に啓発し、認知神経科学からの検討や解明の必要性を訴えている。前述した橋元や麻生の危惧、清川や片岡や筆者の見解と一致しているといえよう。学校への「IT化革命」が加速する風潮もみられ、成長段階による影響の違いも検討する時期にきていると思われる。その上で1999年アメリカの小児科学会が発表した、テレビ暴力の議論から2歳まではテレビ接触をしないように勧告を出したり、筆者の面接から得られたような

視聴スタイルのガイドラインを一般家庭に啓発するべきだろう。信頼性の高い研究結果が早急に必要である。

(2) 人間発達の基盤を形成する乳幼児の育児環境を整備し、社会的支援の必要性を再考する。

乳幼児の生活にテレビ・ビデオ依存傾向が高まった背景には、図12に整理した現代の育児環境の困難さがある。現在、エンゼルプランを中心として様々な育児支援活動が試みられているが、単一の育児環境の変化・改善を試みても、養育者の子育ての不安と負担から生ずる生活スタイルは変化しないであろう。つまり、室内で過ごすことからのテレビ・ビデオ依存育児は改善されず、循環していく。1980年代の育児不安[牧野　1982]以上に地域の弱体化も絡み、深い子育ての困難さが見られる。今後の育児支援に必要なことは、総合的な育児環境の改善につながる、親子の集う場、遊べる場の提供とそれを支える人材であろう。具体的には、親子の交流ができ、子ども同士で遊べる場、他の子どもを見る機会、子どもの発達プロセスの学習や養育者の交流をコーディネートでき、子どものノンバーバルな行動を解読できるスタッフ等、ハードとソフト両面の育児支援環境の整備が必要と思われる[中野・土谷　1999]。そこに親になる以前の学童期・青年期との交流も視野にいれたい。

(3) 今後の育児支援活動の中心的役割を担う保育園や幼稚園等の保育施設で、乳幼児の心身発達に必要な保育活動の充実を図り、同時に養育者への啓発を行うことが求められる。

乳児期早期からのテレビ・ビデオ長時間接触の実態は、子ども達が人間として誕生してから、人類が普通にしてきた生活と遊びを奪い、当たり前に育つはずの姿が育たない現象を生じさせている[土谷　1999b]。子どもの笑顔、目の輝き、保育者や友達と嬉しそうにはしゃぐ姿等々。子どもたちにとって最初の集団である保育園や幼稚園等の保育施設は、家族以外の集団や社会生活の楽しさを伝える役割がある。また、子どもの人間発達にとって重要な体験が乏しい幼児には、事例で示したように臨床的な保育活動の補完によって、心が柔らかい幼児期には親子関係の調整がしやすい[渡辺　前出]ことと同様に、澤口の言う脳の感受期には人間の心身発達の育ち直しが期待される。思考力の低下について議論しているJ. Heary[1992]も乳幼児期にローテクの手でふれる遊びの重要さを指摘しているが、五感を充分に使う遊びや他者との交流遊びの充実を確認し、行事や能力開発に主眼をおく保育活動には見直しが必要である。また養育者にも過度の放課後学習より仲間遊びの重要性を啓発することが必要であろう。幼い時期に群れの中で遊ぶことは社会的スキルの獲得に重要であることは、さまざまな種の動物実験が指摘

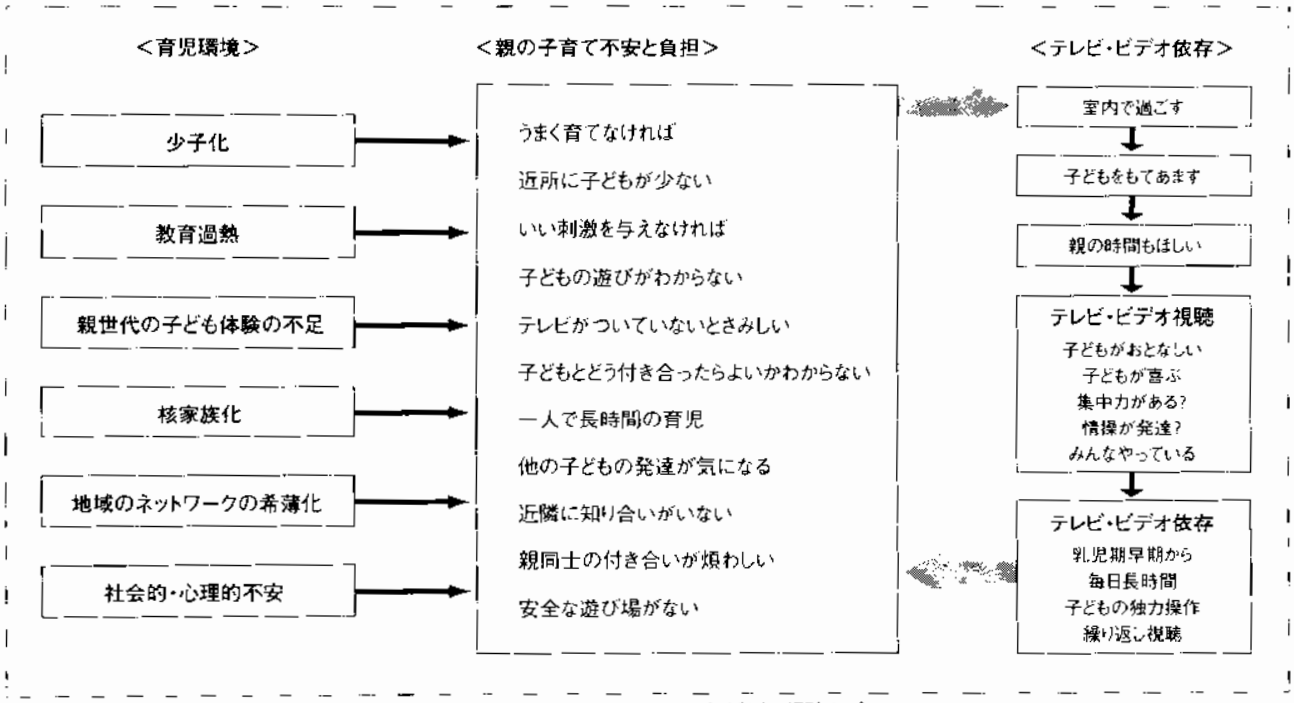

図12　乳幼児早期からの長時間テレビ・ビデオ視聴のプロセス

[例えば、森永 1990]しているが、人工的な子育てを養育者と共に、また異年齢層に関わる多職種の大人の交流によって再考する必要がある。

家庭にニューメディアが急激に普及したこの10年、人間本来の子育ちと子育てが見直され、20世紀から21世紀へ人類の英知が試されているように思う。

（本稿は、家庭教育研究所紀要20.21.22に一部発表したものに加筆修正してまとめた。調査・面接にご協力くださったご父母の皆様と修了生に深く感謝いたします。）

＜注＞

文部科学省委嘱の神奈川県家庭・地域活性化会議による「神奈川県における家庭教育に関する調査」（白鳥稔代表、日立家庭教育研究所実施協力）より、メディアに関する調査項目の有効回答数を再集計した。

＜参考文献＞

麻生武 1996「"ワンダーランド"への旅立ち」『ファンタジーと現実』金子書房 pp.19-26
Bower,T. 1979『乳幼児の知覚世界（古崎愛子訳）』サイエンス社
ベネッセ教育研究所 2000『幼児の生活アンケート報告所』ベネッセコーポレーション
日本子どもを守る会編 2000『子ども白書2000年版』草土文化
片岡直樹 1999「新しい言葉遅れの子ども達 長時間テレビ・ビデオ視聴の影響」『日本小児保健健学会第46回大会論文集』
清川輝基 2000「メディアの発達と子どもの発達」『子ども白書2000年版』草土文化 p.107
橋元良明 1995「映像メディアと脳―テレビ映像の大脳生理学的アプローチ」『マス・コミュニケーション研究』vol. 46
橋元良明 1996「情報化と子どもの心身」『変わるメディアと社会生活』（児島和人・橋元良明編著）ミネルヴァ書房 第8章 pp.150-170
Healy,J.M. 1992『滅び行く思考力（西村・山田訳）』大修館 p.342
一場順子 2000「子どもと司法をめぐるこの一年」『子ども白書2000』草土文化 pp.260-263
岩佐京子 1977『テレビに子守りをさせないで』水曜社
子安増生・山田冨美雄編 1994『ニューメディア時代の子どもたち』有斐閣
久保田競 1997「脳の話」『母の友5月号』福音館書店 pp.26-37
牧野カツコ 1982「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』3
正木健雄 1995『おかしいぞ子どもの体』大月書店
正高信男 1995『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』講談社現代新書 p.175
箕浦康子 2001「子ども・メディア・生涯教育」『情報革命の光と影』カルチュラルエコロジー研究委員会（編）第5章 NTT出版、中野（2000）の論文の引用についてはp.105、澤口（1999）の知見はpp.178-179
森永良子『犬は子をどのように育てるか』どうぶつ社
文部省 1999「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」（日本2300人,他国1000人対象）
中野由美子 1993「乳幼児期の早期教育―早期の識字教育と子どもの発達―」『家庭教育研究所紀要』15
中野由美子・土谷みち子 1999『21世紀の親子支援―保育者へのメッセージ』ブレーン出版
野田正彰 1898『コンピューター新人類の研究』文芸春秋社
佐渡真紀子 1999『子どものテレビとテレビゲームへの接触状況に関するアンケート調査報告書』慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
下條信輔『＜意識＞とは何だろうか：脳の来歴、知覚の錯誤』講談社現代新書 pp.91-100
汐見稔幸 1993『このままでいいのか超早期教育』大月書店
Stern,D.N. 1979『母子関係の出発（岡村佳子訳）』サイエンス社 p.100
生涯学習審議会 1999「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」文部省
小児行動評価研究会「小児行動質問紙表」
白石信子 1999「伸び続ける幼児の教育テレビ視聴率」『放送研究と調査』NHK放送文化研究所
高良聖編著 1996『警告！早期教育が危ない―臨床現場からの報告』日本評論社
土谷みち子 1998「乳幼児期のビデオ視聴が子どもの成長に与える影響 保育臨床的係わりの試み」『家庭教育研究所紀要』20
土谷みち子 1999a「長時間ビデオ視聴していた幼児に対する臨床保育アプローチ 集団場面における「緩衝拠点」の有効性」『家庭教育研究所紀要』21
土谷みち子 1999b「乳幼児の育ちの基盤を考える」『21世紀の親子支援―保育者へのメッセージ』（中野由美子・土谷みち子編著）第1章 pp.1-24
土谷みち子 2000「乳幼児のメディア生活の実態と臨床保育内容 神奈川県未就園児の生活調査から」『家庭教育研究所紀要』22
梅津八三 1978「各種障害事例における自成信号系活動の促進と構成信号系活動の形成に関する研究―特に盲ろう二重障害事例について－」『教育心理学研究年報』17 pp.101-104
Umezu,H. 1978 *The Organization of behavior and sign system activity* University Press of America pp.455-475
渡辺久子 2000『母子臨床と世代間伝達』金剛出版 pp.38-40

（つちや・みちこ　日立家庭教育研究所主幹研究員）